

平成 23 年度 第 6 回 物理学教育 FD/ICT 活用研究委員会 議事概要

- I. 日 時:平成 24 年 2 月 24 日(金) 14 時 00 分から 16 時 00 分
- II. 場 所:私立大学情報教育協会 事務局 会議室
- III. 出席者:藤原雅美委員長、川畑州一副委員長、太田雅久委員、満田節生委員、寺田貢委員、
徐丙鉄委員、松浦執アドバイザー
(事務局) 井端事務局長、森下主幹、松本職員

IV. 配布資料

- ・会次第
- ・平成 24 年度 物理学教育 FD/ICT 活用研究委員会 名簿
- ・参考1「ファカルティー・デベロプメントとIT活用」2006 年版 抜粋
- ・参考2「学士課程教育の構築に向けて」(答申)平成 20 年中央審議会 抜粋
- ・参考3「日本経済新聞夕刊、2011 年 11 月 22 日、大学改革へ協議体」
- ・参考4「全私学新聞、平成 24 年 1 月 13 日、シラバスの充実方策」
- ・参考5「文教ニュース、平成 24 年 2 月 20 日、平野文部科学大臣の表明」
- ・資料①「物理学教育における学士力の考察」
- ・資料②. 1「物理学教育における教育改善モデル(その1)」
- ・資料②. 2「物理学教育における教育改善モデル(その2)」
- ・資料③. 1「海外新聞のIT活用記事とネットワーク利用に関する心理的な視点」
- ・資料③. 2「大学教育におけるポートフォリオの活用」
- ・資料③. 3「FD活動分析シート」
- ・平成 23 年度 第 5 回 物理学教育 FD/ICT 活用研究委員会 議事概要

V. 議事概要

委員長より、これまでに協議してきた教育改善モデルを実現するための教員の教育力について検討するとの趣旨発言があった

議事に先立ち、事務局より配布資料の確認があり、委員長より議事録担当者の指名があった。

1. 事務局長より、資料4に関する説明があり、この事業の広報に努めていただくよう各委員に要請があった。
委員から、特殊なプラットフォームが必要になり見ることのできないコンテンツのあることが指摘された。
2. 事務局長より「参考1～5」の資料に対する説明がなされた。
この委員会においては「教員の教育力」として、これまでに立案したモデルの実現のための指導能力にまずは限定したいとの説明があった。私情協としては、この趣旨に沿った理論構築をここで言い、それを将来発展させていきたいとのことである。具体的な説明として、「参考1」p14、教育の質保証、社会への信頼性の強調、p15④の米国での評価項目、p16(3)の求められる教員の指導能力について、私情協とし

ての基本対応が示された。「参考2」については、将来、大学、国の行うべきことに対するすみ分けが話された。提案モデルを中心にICTでの教育能力を議論する利点として、私情協が抵抗なく本来議論すべきところである教育力に助言できる有効な道筋であるという方針が示された。つまり私情協として大学のガヴァナンスに向けた有意義な発信が一つの目標になるということであった。「参考4」については、各大学におけるシラバスの重複が検討対象になるという指摘であった。委員から、現在各私学は「ギャップイヤー」の問題に頭を悩ませているがこの問題のために教育改善の問題が飲み込まれてしまうのではないかと懸念するが、二つの問題の関係をいかに図ろうとお考えかという質問がなされた。一体として考えるとの意向であった。

3. その後、資料に基づく具体的議論に入り、意見交換がなされた。

資料③. 1については、教室で対話によって取得できるものとオンラインで学べるものとの識別が重要であること、また講義から離れて学生同士で議論させる授業スタイルにおいても適切なネットワークシステムの活用が、学生の心理面において重視されるべきことを、新聞記事の論説内容にてらして説明された。

資料③. 2に関しては、教えるという専門的な仕事に対するエヴィデンスとして何かを残す意味でティーチングポートフォリオに価値を見いだせると言う説明であった。

委員からは、ポートフォリオという名前に煩わされず、各自の教育活動や工夫を記録し続けることが重要であることが指摘された。また、音速の概念を理解させる興味ある実験授業が紹介された。

資料③. 3においては、公開授業は教員の心を痛めるということ、従って授業コンサルテーションの中でPCKを向上させていくことが議論されているという報告があった。また、ミドルレベルでの開発・支援について、カリキュラムを俯瞰できる形で構成するためには教員全体のポートフォリオを活用して、履修の流れ、カリキュラムの有機的つながりを一望できるように提示することが必要であると述べられた。

その後、自由討論が行われた。

最後に、今後の委員会のスケジュールが事務局長より示された。今日の全般的な議論を踏まえて、5月から本格的な活動に入る。本日の話しのスケルトン的なものを2ページに、授業モデルに関する教員の指導能力の具体的な内容に関しては4ページに、さらに大学のガヴァナンスとして理解できるような教員の教育能力についても1ページ程度にまとめることにしたい。5月から文章作成と推敲を重ね、9月には校了としたい。10月にゲラ刷り段階に入り精査していく。このためには今後5回程度の委員会が必要となる。どのような形で文章作成を進めるかは次回の委員で決める。

4. 次回委員会開催日程

事務局からメールで日程を調整することになった。

以上